

2009年7月15日 発行

# 市史だより

F u k u o k a

9

史的再発見マガジン  
[シシダヨリ・フクオカ]

Spring/Summer 2009

TAKE FREE

特集

## 「海の玄関」、 志賀島を知る。

連載コラム「歴史万華鏡」／連載コラム「福岡市史への歩み」  
部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）

編集／発行

福岡市博物館  
市史編さん室



SPECIAL  
FEATURE

福岡市東区・志賀島

## 波をわけゆく海の中道

地図を広げると、福岡市の東側は海の中道から志賀島にかけて細長く海に突き出していて、まるで鳥が羽を伸ばしたような地形をしています。大変印象的な形ですが、このことは古くから知られていたようです。

和銅六(七一三)年、政府は風土記の撰進を諸国に指示し、各地の特産物や、山川原野の地名の由来、伝説などを記すように命じました。残念ながら筑前国の風土記のちに散逸してしまい、諸本に引用された逸文の形でしか知る事ができませんが、『**新日本紀**』(下部兼方著、鎌倉時代成立)には次のような逸文が載せられています。

むかし神功皇后が九州にやつて来た際、夜、志賀島に停泊し、火をもらうために従者の小浜を志賀島に遣わしたといいます。戻ってきた小浜は、「この島と打昇浜とは近く相連接けり。ほとんど同じ

き地というべし」と報告しています。

「打昇浜」は海の中道のことと考えられています。逸文は「よりて近島という。今、なまりて資珂島」と続いています。打昇浜に近い島から、志賀島と呼ばれるようになったというのです。

あくまでこれは、神功皇后伝承に基づいた地名の起源説話というべきものですが、その背景には、海の中道から志賀島へ続く地形が特異なものとして、古代の人びとも認識されていた事がわかります。

この志賀島には志賀海神社が鎮座しています。『延喜式』(十世紀成立)にも名神としてその名を連ね、古来、博多湾を出入りする船が立ち寄り、船乗りたちが航海の安全を祈願してきました。

志賀海神社には、戦国時代の武将で文化人としても著名な、細川幽斎が詠んだ二首の和歌懐紙が所蔵されています。先日、阿曇宮司のご教示によって、

市史で調査する機会に恵まれました。

**A** 三笠山 さしてやかよふ しかの嶋  
かみのちかひの へたてなければ  
玄旨

**B** 名にしほふ たつの都の 跡とめて  
なみをわけゆく うみの中道  
玄旨

※「玄旨」は細川幽斎の剃髪後の号

この和歌の成立の経緯については、幽斎が著した『九州道の記』という紀行文からわかります。『九州道の記』は、天正十五(一五八七)年の豊臣秀吉による島津氏平定に際し、博多まで下向した幽斎が、その道すがら見聞いたことを書き記したものです。これによれば、同年五月二十四日夕方頃、細川幽斎は志賀島に到着し、志賀海神社の宮司坊に宿泊することになり、同社の由来を聞いたり、縁起を見たことがあります。その時、感じたことを詠んだのが **A** の歌、また宮司坊から海の中道を眺め、天橋立と思えば比べて詠んだのが **B** の

### 交通アクセス

- 志賀島  
【JR】香椎線「西戸崎駅」下車、西鉄バスに乗り換え、「志賀島」停留所下車。  
【市営渡船】博多埠頭ベイサイドプレイスより船で約30分、「志賀島」下船。
- 奈多  
【JR】香椎線「奈多駅」下車。



ないエピソードとはー。  
を知る。



1



3



2

1 志賀海神社 2 福岡市埋蔵文化財センター所蔵 中津宮古墳出土装身具(一部) 3 志賀海神社所蔵「和歌懐紙」

歌と記されています。紀行文には続けて、「これ両首を書きて奉納して」とあります。

『九州道の記』を読むと、合戦への参陣日記というより、名所旧跡の観光日記という印象を受けます。志賀島とそれに連なる海の中道は、幽斎にとつて、自らの領国である丹後国にある天橋立を想い起こさせる景勝地として、深く印象に残ったに違いありません。

### アヤを打ち振り、島の盆踊り

ところで、志賀島の夏の風物詩に、市の無形民俗文化財に指定されている「志賀島の盆踊り」があります。

志賀島の盆踊りは「アヤ」と呼ばれる、竹に色紙を巻いて房をつけたものを使うのが特徴です。七七五調の歌にあわせて両手に持ったアヤを打ち鳴らしながら、ゆったりとした所作で踊るさまには、現代風の賑やかな盆踊りとはまた違う、しみじみとした情感があります。

このアヤ、広くは綾竹あやだけといい、綾竹を持って踊る所作は東・西日本の各地の民俗芸能で見ることが出来ます。近隣では、新宮町相島あいのしまにも綾竹を用いる盆踊りが伝わっており、むかし相島に

まるで鳥が羽を伸ばしたような形の、東区・志賀島エリア。意外と知られてい

## 特集

# 「海の玄関」、志賀島



志賀島の盆踊り

渡航して興行していた芦屋方面の操り人形師たちが伝えたのではないかといわれているそうです。

芦屋方面の操り人形師という点、江戸から明治にかけて、遠賀川流域でさかんに歌舞伎・傀儡などを興行し、筑豊・北九州地方の民俗芸能に影響を残した芦屋役者や植木役者が思い出されます。役者たちは筑前の沿岸や島々も巡って興行したそうですから、相島に彼らの影響があったとしても不思議ではありません。

志賀島の盆踊りの由来ははっきりしませんが、相島との共通点を見ると、踊りは海を渡って伝わったのかもしれない。

### キーワードは「積石塚」

相島と志賀島の共通点は、はるかにさかのぼった時代にも見ることができません。キーワードは「積石塚」。積石塚とは、土の代わりに石を小山のように積んで造られた古墳で、西日本では海辺に見られます。近隣では、相島で二五四基（相島積石塚群）、山口県の萩沖にある見島で二〇〇基以上（ジーコンボ古墳群）が見

つかり、ともに国指定史跡となつています。それほどの規模ではありませんが、志賀島や西戸崎にある古墳も積石塚を意識して造られています。

志賀島の中津宮古墳は積石塚であると推定される古墳ですが、志賀海神社の中津宮がすぐ脇に造られたことから、今では古墳らしい姿を見ることができません。平成六（一九九四）年の調査では、七世紀前半（横穴式石室が造られることが多い時期）の古墳にしては大変珍しい、竪穴系の石室をもっていることがわかりました。中からは土器や、複数人分の耳飾りなどが見つかっています。当時は石造りの小山が海を見下ろしていたことでしょう。

陸地を基点にして海辺を見ると、「どうしてこんなものがここに？」と思うような、辺りとは一風異なる遺跡や遺物、文化・風習が残っていることがあります。行政区分や内陸の文化圏だけでなく、海側にも視点を上げると、その不思議を読み解くヒントが浮かび上がってくるかもしれません。

### ひとくちコラム

### 奈多の松原を想う

奈多の砂浜に広がる松原は表紙の絵図にも大きく描かれています。この光景は昭和になって砂漠緑化に強く影響を与えました。

杉山龍丸は福岡市東区の出身ですが、昭和四十〜五十年代に私財をなげうってのインドの緑化運動に功績のあった人物で、著名な作家・夢野久作の長男でもあります。

杉山は砂漠緑化やインドについていくつかの著述を成し、その中で奈多に言及しています。杉山の基本的なアイデアの一つに、砂漠の拡大を食い止めるために植林を行うことがあげられますが、杉山の脳裏に郷土の奈多海岸の砂浜と松原の風景があったことは想像に難くありません。

杉山龍丸の生涯は子息の満丸氏が『グリーン・ファザー イン ドの砂漠を緑に変えた日本人・杉山龍丸の軌跡』（ひくまの出版、二〇〇一年）で紹介しています。

福岡市制施行120周年記念  
「福岡近代絵巻」

明治22(1889)年4月1日、「福岡市」が誕生しました。今年は市制施行120周年にあたり、11月に記念式典が予定されているなど、さまざまな関連の記念行事が計画されています。

博物館では、福岡市が誕生してからの120年を振り返る特別展「福岡近代絵巻」を開催します。展覧会では、明治・大正・昭和・平成と、福岡・博多の町のうつりかわりと、そこに暮らす人びとの生活の変化を、写真や映像で紹介します。

昭和2(1927)年に現在の大濠公園(福岡市中央区)で開催された東亜勲業博覧会の記録映像には、博多駅前の賑わいや、博覧会見物を楽しむ人びとの様子が記録されています。昭和20年6月19日の福岡大空襲以前(昭和10~14年頃)の市街地を低空飛行で撮影した写真は、すべてが公開されるのは、今回が初めて!

また、昭和30年代、福岡市民を熱狂させた西鉄ライオンズ関連の資料も必見です。

会期

平成21年9月19日(土)~11月8日(日)

※月曜休館

※9月21日(月・祝)と10月12日(月・祝)は開館

9月24日(木)と10月13日(火)は閉館

会場

福岡市博物館特別展示室A・B



お知らせ



第5回 福岡市史講演会

「そらおおごと! ~福博藝能いろはにほへと~」

「福岡近代絵巻」とタイアップして、市史編さん室では今秋に第5回市史講演会を開催します。

今回は近代以降の福岡・博多の「芸」についてとりあげながら、市民の方々の暮らしの中に、芸がどう息づいているのかについて考察する予定です。詳しくは今後「市政だより」やチラシ等でお知らせいたします。どうぞお楽しみに。

日時

平成21年9月19日(土)

午後1時30分~4時50分【予定】

場所

福岡市立早良市民センター・ホール  
(福岡市早良区百道2-2-1)

◆写真提供 / 福岡市博物館 (いずれも同館所蔵)

【上】東亜勲業博覧会のポスター(昭和2年)より

【下】錦絵「中村座大当書生演劇」(明治24年)より

【背景】昭和10年代の西中洲と那珂川

福岡・城南のオアシス、  
友泉亭公園

明治になると、この地は近隣の村々の小学校、さらに樋井川村役場として利用された後、昭和となって民間に手放され、一時荒廃しましたが、買い戻した福岡市が昭和五十六(一九八二)年に公園として復元整備しました。規模も江戸時代に比べて縮小し、池の水源、茶室等の建物はさすがに当時と異なりますが、今も静かな木々の中の泉池を巡ることができる庭園は、暑い夏を迎える福岡のオアシスといえます。



■写真【右】:現在の友泉亭公園(写真提供:市長室広報課)

■写真【左】:黒田継高像(福岡市博物館所蔵)



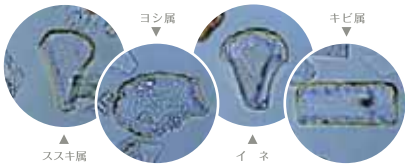
## 考古

考古学では、いろいろな「ガラス」が話題になります。旧石器時代から道具を造る素材として知られる、天然ガラスの黒耀石、装飾品に使われたビーズ玉など、さまざまです。

ところで、植物が小さな小さなガラスを造ることをご存知でしょうか。「植物珪酸体（プラントオパール）」と呼ばれる、イネ科などの植物が造るガラス質細胞で、イネやヨシなど種類によって形が異なります。また、土中の珪酸分を吸収して、細胞に蓄積するため、同じ種類のもので、部位に応じて形が違います。イネ科の葉っぱで手を切るはこのガラスのせいなのです。植物は、一生を終えると土に還りますが、植物珪酸体はガラス質なので、土の中で形を変えることはありません。

考古学では、そこに注目しました。発掘調査現場で採取した土から植物珪酸体が見つければ、当時の環境を考える資料の一つになるのです。

平成二十二年度刊行予定の『資料編 考古3』では、福岡市の植物栽培の歴史や古環境復元に必要な、植物関連の分析成果を一覧化します。



東大寺文書の調査を継続して行っています。観世音寺（現在も太宰府市に所在）は、保安元（一一二〇）年に東大寺の末寺となった際、保管していた文書を写して東大寺に送りましたが、のちに原本は散逸してしまいました。東大寺文書のなかには、この時に観世音寺が送った写りが数多く残されました。

東大寺文書は現在複数の機関や個人が所蔵しており、これまで福岡市史では早稲田大学図書館（成果は『市史研究ふくおか』第二号に掲載）や九州国立博物館（本誌第五号の部会だよりで報告）が所蔵するものについて、調査を行ってきました。今回から、東大寺図書館のご厚意により、国宝に指定されている東大寺所蔵の文書について調査を始めています。国宝指定を受けた東大寺文書は、巻子の形に仕立てられ、成巻文書あるいは百巻文書などと呼ばれているものと、未成巻の文書と大きく分けられますが、今回はまず成巻文書のうちの二巻を閲覧しました。福岡市域に関わる記述を確認する事もより、現物を間近で観察する事により、文書が写された過程について考える事も調査の目的の一つとしています。調査はまだ始まったばかりですが、貴重な成果が今後期待できます。

## 古代

「資料編 中世1」の編集作業のため、校正原稿とにらめっこする日が続いています。

収録予定の「檜垣文庫史料」の中世文書について、本誌第六号の部会だよりとは別の話の一つ。この史料群には、九州大学教養部の故檜垣元吉名誉教授が収集された、中世から近現代まで多種多様な史料があり、中世関係の貴重な史料も含まれています。中世専門部会の調査では、九州大学附属図書館六本松分館（当時）に架蔵されている檜垣文庫の整理カードをすべてめぐり、関係しそうな史料の抽出を行いました。その中に、「書状他綴（明治期影写）」（架蔵番号1604、刊本目録未収録）という史料がありました。一見したところ、中世関係とわからないのですが、念のため閲覧したところ、「橋爪文書」と通称される中世文書の写でした。

そこには戦国末期に筑前国を支配していた大友氏の立花城督であった戸次道雪・立花統虎の発給文書など全七点（うち六点が中世）が影写されていました。しかも原本が所在不明で、市史でも探しあぐねていた史料でした。これらは今回の資料編で収録の予定です。詳しくは『資料編 中世1』をご覧ください。

## 中世

## 近 世

平成二十二年度刊行予定の『資料編 近世』に収録する資料の選定がほぼ終わりました。基本的に抄録はせず、利用価値の高い資料を収録するという方針のもとに収録候補を挙げ、会議でさらに検討を加えました。

「領主と藩政」をテーマに、小早川氏・黒田氏関係の資料、長崎警備や朝鮮通信使応接関係の資料、そして福岡藩政関係の資料を収録する予定です。「領主と藩政」に関する膨大な資料のすべてを収録することはできませんが、黒田家関係では藩主の隠居・家督相続に関するものや藩主の家族に関するもの、藩政関係では福岡藩のさまざまな記録類に関するもの、年始の儀式や年中行事、藩祖の顕彰など、これまであまり多くが語られなかった部分の資料も含まれます。

資料の選定が終わり、あわせて進めていた筆耕の作業も終了しましたので、これから刊行に向けて本格的な編集作業に入ることになります。また今後も、福岡藩の家臣、福岡城関係の資料調査を引き続き行っていく予定です。調査と並行しながらの刊行作業となりますが、刊行に向けて鋭意作業を進めていきたいと思えます。

福岡市公報は福岡市が条例、規則等を公示する機関紙です。『資料編 近現代』は、明治初期から昭和三十年代までの福岡市の政治、行政に関する資料の収録を構想していますので、市公報は市史編さんのための基礎資料ですが、福岡市には昭和四十一（一九六六）年以降のものはありません。

この市公報は『福岡市史 昭和編資料集前編』を編さんした昭和五十八年頃にはすでに失われていたようで、市公報の所蔵者として福岡地方裁判所が記されています。当時の編さん担当者から聞いたところによると、やはり当時も公報を探してまわり、最終的には地方裁判所にあった公報を借用して筆写したとのことでした。

資料が失われた原因としていわれているのが、昭和二十八年の水害です。市役所地下の書庫が冠水したことで公文書が被害を受け、少なくとも数々の資料が破棄を余儀なくされたようです。公報もその中に含まれていたのでしょう。

急いで地方裁判所に連絡を取ってみました。が、裁判所においてもすでに処分されたあとでした。今のところ確認できる公報は、福岡県立図書館が所蔵しているごく一部の期間のものしかないようです。

## 近 現 代

## 民 俗

博多祇園山笠や筥崎宮放生会とあわせて三大祭りと呼ばれる、博多どんたく港まつりの調査に行ってきました。

さて、「どんたくは雨がつきもの」といいます。今年はどうかと思っていると、二日目（五月四日）はジンクスどおりの雨。しかしどんたくは雨天決行です。福神たちはビニールを被って通りを行き、肩衣かたぎにたっつけ袴姿の一行がそれに付き添い、パレードの沿道には傘を差した大勢の見物客が並んでいました。

どんたくの源流である博多松囃子まつばしは、江戸時代には小正月の一月十五日に行われていました。当時、松囃子の行列は、藩主表敬のため福岡城まで出向いており、その名残でしょうか、今も博多松囃子の三福神の順路には福岡城跡が入っています。

開催日や祭りの規模、年賀の行事という意味合いは変わりましたが、どんたくを締めくくる総おどりで、観客もごく自然に輪につらなって「ぼんち可愛いや」にあわせて踊る姿には、祭り好きな人々の気風が今も受け継がれているのを感じます。



昭和25(1950)年6月、新たに市史編さんを命じられた小野有耶介おのうやけいは、その任を果たすべく活動を始めます。同年10月、「福岡市史編纂に対する構想へんさん」を作成しました。彼の市史編さんに対する基本方針を凝縮したものです。これは、B4サイズの和紙用紙4枚に和文タイプライターで浄書されたもので、『1.総説』、『2.執筆基準』、『3.編別表』、『4.目次案』が中心となっています。どのように使われたのかはわかりませんが、まさに市史編さんに対する構想を読み取ることができます。

『1.総説』では、「わが国史書の通弊である単なる英雄譚たんに終始することなく、悠久その始原を知らない歴史的存在、みなとはかたの生成発展の実相を明確且つ動的に把握する。従ってここに記述されるテーマは、英雄の行動記述の他に、さらに空間的には九州乃至日本における博多の価値、対外交流乃至貿易基地としての博多の機能等、商業貿易都市としての博多の実態であり、時間的には破壊に次ぐ破壊になお生成発展して止まない博多の躍動であり、人的には古来海に生くる人民の、しかも異と同化する民主的人民の歴史である」としています。

『2.執筆基準』で特徴的な事を抽出すると「伝説、口伝などは参考にとどめ、国内外の原資料に拠ることとする。特に古代史においては考古学的考察を併施する」と要約できることです。以下は紙数のため省略します。

この方針に沿って、同時に年次計画を作成し、年度ごとに時代区分を割り振って資料を収集調査する事としていました。結果的にいえば、残念ながらこの年次計画は計画通りにはいかなかったようです。

しかし特筆すべき事が決定されています。同年11月30日、構想を実現するために「福岡市市史編さん委員会規定(庁達第23号)」が正式に設置され、編さん事業が市政のなかに正式に規定されたことです。編さん委員会の設置、委員会の業務、組織、運営、学識経験者の顧問化等に言及した、わずか6カ条10行ばかりのものですが、制式化されたことに大きな意味があります。昭和26年7月、編さん委員を決定し、委員会を開催するところまで進みましたが、委員会はそのまま無期延期になりました。理由は「予算捻出が不可能」と「時期尚早」という事でした。しかし、小野は予算措置がないことがネックと考えたのでしょうか、翌年6月には編さん委員長宛に市史編さんの重要性を説き、予算措置を求める上申書を作成し、実現へ向けて果敢な努力をしています。

当時の社会状況としては、財政事情も敗戦直後からすれば好転しかけていたのですが、朝鮮戦争が勃発しており、社会全般的には不安定な状況があり、いま少しの時間が必要とされていた頃だったようです。

表紙の写真

おくにぶんげんえす 御国分間絵図 (部分)

【福岡市博物館所蔵】

『御国分間絵図』は福岡藩主黒田家に伝来した絵図の一つです。絵図裏面には「元禄十二年御国分間絵図」との題が貼られており、元禄14(1701)年に幕府へ提出した筑前の国絵図の下図として作成されたものと考えられます。

海中に見える朱線は船の航路を示します。当時、福岡城下の荒戸あらくとから出航した船は志賀島村の港で潮や風を待ちました。絵図には「大船五六十艘カ、ル」(大型の船が五、六十艘停泊できる)と記されており、これを見ると志賀島はまさしく「海の玄関」だったといえるのです。

Editor's Voice

編集後記

市史だより Fukuoka 第9号をお届けします。

今回の特集は、各分野の担当者がそれぞれ原稿を持ち寄り、東区志賀島・海の中道の持つ魅力をごく一部ですがご紹介しました。次号は冬の刊行予定です。どうぞお楽しみに。

本号より紙面を大きくリニューアルしました。これまでより一層、皆さまに楽しんでいただけたら幸いです。

from: 市史編さん室